

8月30日 (金)

シンポジウム

公開シンポジウム

13:30~16:30

法経第4教室

いのちの大切さをどう教えるか

司会 岡田 渥美 (神戸女子大学)
村田 昇 (京都女子大学)

提案者 大西 正倫 (大谷大学短期大学部)
上藺恒太郎 (長崎大学)
市木美智子 (洛央小学校)

☆いのちの教育の必要性と困難性
☆子どもの死の意識といのちの教育
☆自分の誕生を喜び
いのちを大切にする子の育成

〈趣旨〉

今日の社会においては、臓器移植と脳死問題、AIDS、ターミナルケアや尊厳死、子どもの虐待や学校でのいじめと自殺等々、「いのち」にかかわり、「いのち」の大切さを改めて考えさせずにはおかない問題が数多く見いだされる。

ヒトは自然から生まれ、自然からはみ出して文化を産み出し、文明を発展させてきた。しかし、いまや人間の営み自体が自然を破壊し、あらゆるいのちを傷つけつつあるように思われる。科学技術は進歩し、生命をも操作の対象とするに至っている。そうして結局、人間は、いのちを感じ取る力を衰えさせてしまったのではないか。

教育という観点から見れば、「いのち」とは、具体的な一人ひとりの子どものいのちを指すだけでなく、生活科をはじめとする諸教科にかかわり、食べ物や性や環境の教育にかかわり、道徳・倫理の教育や death education にかかわり、さらには、人間とその営みをどのように位置づけ直すかという問題を通して宗教の世界にもかかわっていく、広がりと深さをもったテーマであると考えられる。「いのち」という語は、たしかに多義的で曖昧であるが、むしろ、「いのち」をあらゆる事柄の根底にかかわるものと捉えることによって、逆に、さまざまな問題のつながりや深みが見えてくるのではなかろうか。

しかし、どのようにすれば「いのち」の大切さを「教える」ことができるのか。「いのちを粗末にするな」「いのちを大切に」というような言葉を繰り返すだけでは空しいように思われる。「いのちの大切さ」とは、そして、そのことに「気づく」とは、どのようなことなのか。そのとき、大人(教育者)は何ができるのか。本公開シンポジウムでは、「いのちの大切さをどう教えるか」をテーマとして、さまざまな角度から、「いのち」と「教育」について考えてみることにしたい。